『比較日本文化学研究』第 13 号（2020）

論　文

中日間の蚕神の信仰についての対比

―― 起源とその変遷を中心に ――

羅　　石巧

西南科技大学講師・広島大学大学院文学研究科博士課程後期

On the Comparison of Belief in the Silkworm God in China and Japan

―― focusing on the origin and the evolution ――

Luo Shiqiao

Abstract: China, the world's largest sericulture country, has a long history of silk, which can be traced back to 7000 years ago. The early ancestors associated silkworms with sacrifice and used them to serve ghosts and gods. With the further increase in productivity, people began to domesticate silkworms and plant mulberry trees. During the Pre-Qin period (before 221 B.C. when the First Emperor of Qin united China), silk production has been throughout the middle and lower reaches of the Yellow River. Due to the prosperity of silkworm industry, the belief of silkworm god spread among the people and became a part of Chinese silkworm culture. Japan, a country close to China, has been raising silkworms for more than 1,700 years since the Yayoi Period (300 BC to 250 AD). After the opening of the Yokohama Port in 1859, sericulture developed rapidly and reached its peak in the 1930s, driven by the Meiji government's policy of "breeding silkworms to promote business". Along with the Chinese sericulture technology, the belief of sericulture god took root and sprouted in Japan. Meanwhile, Shinto and folk indigenous sericulture god belief also developed and has been passed on. By comparing the origin and evolution of sericulture belief in China and Japan, this paper explores the historical origins and respective characteristics of sericulture culture in China and Japan.

Key words: silkworm god, belief, origin, evolution, comparison

1. はじめに

桑を栽培し、蚕を飼うことは新石器時代晩期の黄河ならびに長江流域の農業経済の構成要素の一つであった。早期の先祖は蚕と祭祀を関連させて考え、鬼神に仕えることに用いた。生産力の更なる向上に伴い、人々は野生の蚕を

飼い、桑の木を育て始めた。商（殷）代にはまさに典蚕の官僚たる「女蚕」が存在した。甲骨文中、蚕神を祭祀する卜辞にはおおよそ、4本のものがあり、祖庚、祖甲時、蚕神と上甲微をともに祭る一条の卜辞を以て、事例とすれば、その卜辞は「貞元は五牛を示し、蚕は三牛を示し、十三の月[1]」と言っていた（胡厚宣、1972）。この卜辞の意思は、祭祀は元は上甲が牛5頭を屠殺することを要することを言っており、蚕の祭祀は牛3頭を用いることを示し、祭礼の荘厳さを見うるのである。「示」は神祇を指しており、故に蚕示もまた、すなわち、蚕神なのである。当時の統治者が蚕に対して殊のほか尊崇していたことが窺える。周代には“親蚕”の制度があり、天子と諸侯は皆、“公桑蚕室”を有していた。当時の人々は、蚕が卵を育つ、蚕の脱皮前の休眠状態、蚕の成長、蛾になること等、蚕の生長形態に対し、既に一定の認識を有していた。秦代の前に至って、蚕糸の生産は既に黄河中下流域に普及していた。養蚕や桑業の隆盛に伴い、蚕神信仰もまた、統治階級と民間の間に伝播、発展し、中国の蚕桑といった文化の一部分となった。日本では、弥生時代（紀元前300年～西暦250年）から養蚕が始まり、今日に至るまで、既に1700年以上の歴史を有している。1859年の横浜開港以降、明治政府の「殖産興業」政策の推進の下、養蚕業は急速に発展し、1930年代には頂点に達した（朱宗才、1998）。蚕糸は極めて長期に渡って、日本の外貨獲得の主要な来源であった。養蚕技術と共に中国から日本に伝播した蚕神信仰は日本において、発芽し、根を下ろし、これと同時に、神道と民間本土化（土着化）した蚕神信仰もまた、不断に発展、伝承されたのである。伊藤（1979）、小南（1984）と曹建南（2000）の文中において、神話伝説の類同、変化等の角度から、中日間の蚕桑の起源、伝説に対する対比研究を行っている。顧佳希（2002）において、民俗学の角度から江蘇、浙江一帯の蚕糸文化の日本に対する影響を分析した。学者達は主として、中日蚕桑の起源伝説の異同への比較に着眼し、蚕神信仰の伝承過程と現状に対しては分析を進めて来なかった。中国の蚕桑文化に対する研究もまた、江蘇、浙江地区のみに集中し、四川、重慶地区の中国蚕桑文化への貢献は軽視されて来た。本稿は中日両国の蚕神信仰の起源と変遷の対比を通して、中日両国の蚕桑文化の淵源と民族の特徴を探求するものである。

2. 中国における蚕信仰の起源

20 世紀、20 年代から 80 年代に至るまで、考古学者達は、今から約 7000 年前の仰韶文化遺跡、北辛文化遺跡あるいは今から約 7000 ～ 5000 年前の河姆渡文化遺跡、良渚文化遺跡等で、蚕陶俑、蚕の紋様が描かれた陶器ならびに切り割られた半分の蚕の繭を出土させた。中国蚕文化の起源を約 7000 年前に遡らせたのである。牟永抗・吴汝祚（1993）は、古代人が蚕を育成した最初の動機は、農牧業とは異なり、人々の食料需要を解決するためではなく、また、寒さを防ぎ身体を蔽う普段着の需要を解決するためでもなく、観察と占卜のためである、と認識している。陶紅・張诗亚（2010）は陶器の蚕のサナギは強い崇拝の対象であり、祭祀に供える神物と認識している。趙豊（1996）は、青銅礼器の上に飾られている蚕紋様を、祭祀或いは巫術の時に、人と天の通じ合いをさらに便利にさせるため、と認識している。全体的に上記から知りうるのは、早期の先祖達は原始の桑林中の蚕に対して、強い関心を抱き、彼等は蚕が卵から虫に変り、羽化して蛾になる生態の変化を人の生死、天地との通じ合いと関連させることを望み、蚕を天に通じる手引きの神となし、これにより、蚕に対する尊崇を倍加させたことが、中国の蚕信仰の最初の起源であった。

3. 中国における蚕神の出現

家での蚕の養殖が黄河中下流域、西南地区または江蘇、浙江一帯で普及するにつれて、蚕の神に関する伝説が出現し始めた。蚕そのものはまさに一種の非常に弱い動物であり、外の自然環境の傷害を極めて受けやすいのである。荀子は『蚕賦』中で、「ここに物、有り…その状形であり、度々、神のごとくであり、功は天下に被さり、万世文となす…人は利に属し、飛ぶ鳥、害をなす…冬に伏し、夏に泳ぎ、桑を食し、糸を吐き、先に乱れて、後に治まり、夏に生きて、暑さを嫌い、湿気を喜び、雨を嫌い、さなぎを母とし、蛾を父とし、三回伏して、三回立ち、事はなお大いに止む、度々、これが所謂、蚕の摂理なり。[2]」と記している。蚕は神に化け、功は天下を被うとはいえ、容易に鳥によって害されるのである。夏に生を受けるとはいえ、却って酷暑を過ごせず、湿潤を好むとは言え、一貫して梅雨を過ごすことはできない。故に、蚕農家達は心を込めて、飼育し、また、気候の悪劣さ、病害等故に収穫に影響を受けもするのである。そこで、人々は蚕の豊かな収穫を神に寄託し

出したのであり、祈祷と祭祀を通して、蚕が順調に卵から蛹へと成長し得ることを加護してきたのである。蚕神はまさに歴史の舞台に登壇し出したのである。しかし、蚕神の姓名、来歴の話には、各々、異なったものがあるのである。

蚕神の一つは嫘祖であり、最初のものは、『山海経・海内経』が雷祖をなすことは、「流沙の東、墨水の西に朝雲の国有り、…黄帝の妻・雷祖は昌意を生み、昌意は若水に降り、韓流を生む…[3]」と、いうことであった。嫘祖の嫘には固定的な書き方はなく、早い時期に嫘祖をなしているものとして、まず嫘祖に触れているものは『史記・五帝本紀』である。「黄帝は軒猿の丘に居住し、千西陵氏の女を娶り、嫘祖となした。嫘祖は黄帝正妃となり、ふたりの子を産み、その後、全て、天下を有す[4]」とある。『山海経』と『史記』が既に嫘祖に触れているにも関わらず、この嫘祖と蚕神は無関係である（遊修齢、2002）。秦、漢宮廷が祭祀した蚕神は“先蚕”と称され、これは蚕示の同義語である。『周礼・天官・内宰』が「中春、…婦人に命じて、北郊にて蚕を始め、以て、祭祀となした[5]」と言うようにである。この時期の蚕神祭祀を反映して、まだ専門の呼称を有さず、嫘祖とは無関係であった。

『山海経』と『史記』中の嫘祖は、身分は皆、黄帝の妻子（元妃）であり、蚕神とは関係していなかった。『史記・五帝本紀』また、黄帝は「天地に従うの規律、幽明の占い、死生を言うのこと、存亡の難、時に百谷草木を播き、鳥、獣、虫、蛾を飼い馴らす…[6]」と述べている。これは百谷に種を蒔き、虫や蛾を飼い慣らすことは皆、黄帝の名のもとに記されたということである。もし、虫や蛾が蚕蛾を含むならば、即ち、養蚕は黄帝の発明したものであった。秦、漢には、既に嫘祖を有していたとは言え、秦、漢宮廷の祭祀していた蚕神は「先蚕」と称していた。東漢時代に至って、『後漢書・礼儀志』に菀窳夫人と寓氏公主二つの蚕神を指摘している。「今、蚕神曰く、菀窳夫人、寓氏公主、おおよそ二人の神である。群臣、女性は桑に従い、さらに、蚕を観るに献じる[7]」。唐代の『晋書・礼志上』にも、「漢は、皇后が東郊苑中にて、桑を自ら植え、蚕室は蚕神を祭ることを儀式し、曰く、菀窳夫人、寓氏公主が少牢を用いた[8]」と記載した。

先蚕と嫘祖を関連させ始めたのは、おおよそ北周において、であり、『隋書』には、「北周は、一太宰を以て、祭を行い、さらに、先蚕を西陵氏と定む、と制定す[9]」と見られる。以後、北宋の劉恕の『通鑑外紀』には「西陵氏

の女・嫘祖は帝の元妃であり、民に蚕を育ることを教え始めた[10]」とある。宋代の羅泌の『路史・後妃五』には、「西陵氏の女・嫘祖は帝の元妃であり、民に蚕を育ることを教え始め、糸の蛹を管理し、以て、衣服に供し、天下に肌が凍える患いなく、後世に、先蚕が祀られた[11]」とある。元朝の金履祥の『通鑒網目前編・外紀』中にも類似の記載がある（遊修齢、2002）。これは黄帝元妃、嫘祖、蚕神が合わさって一人（神）となった経過であり、故事はまさにこのように、日増しに整っていったのである。以後、歴代の統治階級は皆、嫘祖を蚕神となし、祭祀を進行させた。

民間にはなおも一つの馬頭娘の伝説があり、嫘祖、菟窳夫人、寓氏公主を併存する多くの蚕神となした。民間伝説中の蚕神は嫘祖ではなく、馬頭娘であった。最初に見られるのは東晋の干宝の『搜神記』である。「太古の時、…伝説において蚕女があり、父は人のために掠め取り、ただ、乗馬するのみであった。母曰く、『もし、父が戻るのであれば、娘は馬の嫁になる』馬はその言葉を聞き、絆を絶って、去った。数日して、父は馬に乗って帰った。母がこのことを告げても、父は認めなかった。馬が叫び、父はこれを殺し、皮を庭にさらした。皮は突然、女を巻いて去り、桑にとまり、女は化けて、蚕になった[12]」と記している。『搜神記』は「太古の時」と提示している。極めて重要なのは、表明は有史以降のことではないということである。単に、晋代に既に極めて流行っていた故事ということではない、ということである。王禎は、『淮南王蚕経』を引用しつつ、「黄帝の元妃・西陵氏が蚕を始め、漢に至って、菟窳夫人、寓氏公主を祀る。蜀には蚕女・馬頭娘があり、これ皆、歴代の祭るところ、同じからず」と述べている。王禎の触れている「蜀には蚕女・馬頭娘があり」は、『搜神記』が馬頭娘の記述を有さないという不足を補いうるものである。王禎が根拠としているのは、前蜀（903年－932年）の杜光庭の『塘城集仙録』の記載かもしれない。当該の書籍の述べる故事や話の筋は『搜神記』に比較して、さらに詳細であり、かつ、馬頭娘の墓が現在の四川省徳陽市内にあることを記しており、「今、その塚は什那、綿竹、徳陽の三県の境界にあり。毎年、祈蚕者は四方から雲集し、皆、霊験を獲る。蜀の風俗、諸々、画塑玉女の像を見ること、絵を描く衣を取り出し、所謂、馬頭娘であり、以て、蚕、桑を祈る…[13]」とある。馬頭娘に関する記述は、上記の文献に留まらず、三国時代の『太古蚕馬記』、唐代の『原化伝拾遺蚕馬』、宋代の『太平広記』等、皆、類似の記述を有している（顧希佳、1991）。世の

人々はこの神話故事を根拠として、「女化蚕」を蚕神、即ち「馬頭娘」として崇拝したのである。江蘇、浙江一帯においては「蚕花娘娘」「蚕花姑娘」と称されている。儒家の「蚕馬同気[14]」という思想の影響を受け、馬鳴王菩薩信仰も派生した。

中国の四川、重慶地区では、また、古代の神話中の蜀王・蚕丛を蚕神に奉っている。明代の曹学佺の『蜀中広記』は「成都聖寿寺には青農神があり、即ち、蚕丛氏なり。蚕丛氏は人間に養蚕を教えたと伝えられ、(時にある家に)一つの蚕を与えた。後に(皆が)集まっても、与えず、これを江上に埋葬したのであり、蚕の墓となった[15]」と記載している。近世では、蚕丛氏青農神は、浙江、江蘇地区で蚕農民達が祭祀する「蚕花五聖」に変化したのであった(施敏峰、2011)。

時間の推移に従い、蚕神信仰は徐々に統一から二種に分かれ、一つは、北周から清代に至って、統治階級の上から下までの嫘祖信仰であり、現在に至るまで、なお、中国の四川、重慶の養蚕地区で活躍しているものであり、二つ目は「女化蚕」故事を起源となす馬頭娘信仰であり、中国の江蘇、浙江の養蚕業地区で比較的、活躍しているものである。

4. 蚕神信仰の日本への伝播

応神天皇時代、後漢末の戦乱故に、朝鮮を経由で日本に移住する現象が出現し出しており、これらの移民は、中国の蚕糸生産技術を伴っていた(施敏、2011)。蚕糸技術の日本での伝播に伴い、蚕糸と関連する蚕神信仰もまた、日本に流入していたのである。主として、「馬頭娘信仰」と「嫘祖信仰」である。

(1) 馬頭娘(オシラサマ)信仰

中国における、秦代以前の黄河流域の気候は現在と似て、比較的温暖であり、故に、蚕桑業が極めて発達し、「強弩の末、魯緒を履くを以て足りず[16]」たる山東は当時の蚕桑の重点的な生産地区であった。後漢から南北朝に至るまで、黄河流域の気候は寒冷期に転じ、隋、唐、五代には温暖に転じたものの、宋以降、元、明、清を経て、気候は寒冷に転じ、北方の養蚕業には不利となり、逆に、南方の養蚕業を旺盛にし、しかるに、唐、宋以降、まさに全国の経済、文化の重心が南方に移転した時期であった(竺可桢、1973)。馬頭娘の故事が長江下流域に伝わったのは、おおよそ晋代であり、中国と日本の

文化交流は唐朝から大いに盛り上がり始め、唐或いは宋の時代に日本に伝わったのかもしれない。

日本のオシラサマの起源は「女化蚕」の故事に来源している。柳田国男の『遠野物語』と今野円輔の『馬娘婚姻談』は均しく「女化蚕」の故事の記載に関係している。今日、日本各地の養蚕業のオシラサマ信仰は馬頭娘信仰の日本での演変である。小南（1984）は、日本の馬頭娘伝説の起源は中国四川盆地の徳陽地区に起源があり、後に中国の江蘇、浙江地区を経て、日本の近畿地方に伝わったのであり、さらに、近畿地方から東北地方、沖縄へと伝播した、と認識している。

中国の江蘇、浙江地区においては、儒家思想「蚕馬同気」の影響を受け、インドの馬鳴王菩薩からも、[蚕神]として祭られている。インドの馬鳴王菩薩は男性であり、蚕神の馬鳴王菩薩と馬頭娘が合体して、変化して、女性になったのである。日本の群馬県、東京多摩地区、福島県または京都府は皆、蚕農家等に祭られている女性・馬鳴菩薩を有している。

（2）嫘祖信仰

嫘祖は正統な蚕神として、歴史は長く、歴代統治階級に重視されて来た。中国の古代において、帝王の農桑の祭祀は極めて重要な一環だった。毎年、春季の吉亥日に、皇帝は先農壇にて「親耕」（自ら耕す）をせねばならず、毎年春季の吉巳日には皇后は先蚕壇にて、「親桑」（自ら桑を植える）を行い、先蚕を祀らねばならなかった。「先蚕」の礼制は周朝に始まり、周代以降、先蚕を祭る礼制が踏襲され、漢代から明代に至るまで、記載された記録は全部で 20 回である。清代に至って、さらに発展し、皇后が先蚕を祭る記録は全部で 54 回を数える（宗宇、2012）。皇室の祭祀を以外、民間の嫘祖宮、嫘祖廟も又、一貫して蚕農達に奉られて来た。

学界は一般的に、嫘祖信仰は馬頭娘信仰同様に日本に伝播したのではないと認識している。しかし、日本の長野県松代町東条字竹原の菩提寺内に、安政 4 年（1857 年）、「西陵氏霊[17]」石碑を奉ることを始めたとの石碑があり、嫘祖を祭祀し、同寺内にはさらに蚕神と同じ保食神の石碑がある。長野県は江戸時代後期から大々的に養蚕業の発展が始まり、第一次世界大戦以前には、「蚕糸王国」と称されていた。養蚕業の大々的発展と同時に、蚕神信仰も日増しに隆盛し、中国の嫘祖信仰を引き込んだことと推測している。

5. 日本独特の蚕神信仰の発展

中国蚕糸技術の日本での伝播は、中国の蚕神信仰を帯びていた。しかし、日本は、その独特の民族文化の背景故に、自己の独特の蚕神信仰を発展させたが、それは大体において、神道系の蚕神、佛教系の蚕神、民間の蚕神、蚕の保護神と蚕霊供養の５つに大別しうる。

(1) 神道系の蚕神

①『日本書紀』と『古事記』中の蚕神

『日本書紀』と『古事記』中には、いずれも蚕の起源に関する伝説がある。『日本書紀』によると、イザナギが火の神・軻遇突智神を生育していた時、陰を焼かれて亡くなる前に臥しながら土神埴山姫と水の神を生む。軻遇突智神と埴山姫を娶り稚産霊神を生む、稚産霊神は頭から桑と蚕を生み出した。同書中にはさらに、保食神が月夜見尊に殺害された後、その死体から牛馬が生み出され、顱からは粟が生み出され、眼中からは稗、眉からは蚕、腹の中からは稲、陰からは麦と大小豆が出て来た。天熊人がこれらを帯びて天界に戻り、かつ、それを用いて、畑と水田作物の種子を育て、さらに養蚕の道もできたという記載がある。『古事記』中には、大気津比売が速須佐之男命に殺された後、彼女の遺体の頭部からは蚕が出、眼中からは稲が出、耳からは粟が出、鼻からはからは小豆が出、陰から麦、尻からは大豆が出、神産巣日は、これらの作物を持ち帰り、種子を育てた。坂井英一の研究によれば、『記、紀』が完成した後、極めて長い時間にわたって、これらの神は世人からは蚕神とは見なされていなかった。近現代の養蚕業の隆盛と日本国学の興起に伴い、蚕神信仰もまた、『記、紀』研究の深まりに従い、徐々に清楚になり、これらの神もまた、蚕を育んだが故に、「カイコを生んだ神」と称されるようになったのである。

②稲荷神

日本の神話中、稲荷神は穀物と食物の豊作を主管する神である。ゆえに、蚕農民達は蚕の豊かな収穫を祈祷するため、稲荷神も蚕神として奉っていた。毎年二月初午、蚕農家達は、蚕の繭の様式の白い団子を作り、各地の稲荷神社に拝みに行くのである。

(2) 仏教系の蚕神

①馬鳴菩薩（先述）

②虚空蔵菩薩

仏教の中には、智慧、功徳、または財産を専ら扱う虚空蔵菩薩が認識されており、日本の養蚕業の規模の拡大の過程において、蚕神が奉られている。毎年1月13日、蚕農家は寺廟で蚕の豊かの収穫を祈祷するのである。

(3) 民間信仰の蚕神

①蚕影明神

江戸時代に始まり、茨城県筑波市蚕影神社を中心とする蚕影信仰が関東地区、山梨県ならびに長野県に伝播している。白馬にまたがる女神像が石碑に刻まれており、「蚕影碑」と称されている。

②絹笠明神

絹笠明神信仰は滋賀県安土町の山桑実寺と茨城県神栖町の蚕霊山千手院星佛寺を中心としている。主に、女神は腹部に馬の図案を有する中国風の衣装をまとっており、手には桑の葉と蚕種紙を持っている。一般に、この信仰は“金色姫信仰”と馬鳴菩薩信仰の結合と認識されている。

③オシラスサマ信仰（先述）

(4) 蚕の保護神

①猫

鼠は蚕を食べ、蚕の繭と蚕種紙を噛むのを好むが、猫は鼠の天敵であり、蚕の保護のため、日本の蚕農家は、猫を蚕の守護神として、祭っている。祭る形式としては、猫石碑、猫石、猫の絵、猫地蔵や招き猫がある。

②蛇

猫同様、蛇は猫の天敵である。故に、蚕農家は蛇も祭り、蚕の守護神としている。

③ダルマ

ダルマは元は、高崎市少林山達摩寺の吉祥物であり、福を祈り、願掛けに用いられる。ダルマは倒れれば、すぐに起き上がり、蚕が休眠した後の蘇生と共通のものを持っている。蚕農家は、立ち上がり（蘇生）は蚕の育成が上手くいく象徴であり、かつ、ダルマの顔色は魔除けの赤色であることから、ダルマを蚕の守護神として奉っているのである。

(5) 蚕の霊供養

当の蚕が糸を吐き、繭を作った後、もし、繭に対して処理しなければ、蚕はまさに蛾となりうるのであり、繭を破って出て来るのである。このような繭はまさに糸を紡ぎ得ない。もし、蚕に一旦、カビが生えたら、まさに保存

し得ない。故に、当の蚕が繭となった後、繭の中の蛹を殺し、乾燥処理を進めねばならない。蛹を殺し乾燥させることが豊かな収穫に換わるのである。蚕農家達は、収入増加による喜びと同時に、蚕の犠牲を感じるのであり、「蚕霊の供養塔」を建立し、蚕の霊魂を奉っているのである（阪本英一、2008）。

上述のように、日本の蚕神信仰は中国の影響を受け、又、自己の独自性を有している。信仰の形式上に見るならば、日本の蚕神信仰は中国に比べて豊富なものがある。具体的な原因としては、以下の数点が挙げられよう。1、創世神話の影響。『日本書紀』と『古事記』の創世神話においては、稚産霊神、保食神、そして、大気津比売神を蚕神に奉っている。2、神道の万物は皆、霊を有するという思想の影響。万物は皆、霊を有するが故に、「蚕霊の供養塔」を建立し、蚕の霊魂を奉る現象が出現したのである。3、江戸中後期から第二次大戦前期に至るまでの日本の養蚕業の発展の影響。史料が、西暦3世紀前後に日本にまさに蚕糸業が出現していた関わらず、発展は比較的緩慢であり、全国展開もしなかったことを証明している。江戸時代中後期、長野、群馬、茨城等の地では、藩の奨励により、大規模な養蚕が始められた。明治維新以後、新政府の殖産興業政策の推進の下、養蚕業はさらに発展した。1929年に至って、日本の養蚕農家は221.7万戸に達し、総農家の39.8%を占めるに至った。1934年、日本の糸の年間生産量は4.54万トンに達し、同年の世界総生産値の3分の2を占めたのであった（朱宗才、1998）。養蚕業の急速な発展も蚕神進行の発展を推進したが、当時の日本は中国の統治階級ほど上から下への蚕神信仰をなしておらず、故に、舶来の中国の蚕神信仰を受けた事を除けば、大部分の蚕農家は、居住地付近の神社や寺廟で蚕の豊かな収穫を祈祷し始めたのである。穀物の豊かな収穫を主管する稲荷神、智慧、功徳または財物を専ら司るする虚空蔵菩薩等をいずれも、蚕神に奉った。馬頭娘の故事や金色姫伝説等を根拠に、蚕影明神や絹笠明神を創造した。猫、蛇等、日常生活中で実際に蚕を保護する動物や福を招くダルマはいずれも、奉られ、蚕の守護神となった。中日間の蚕神信仰の淵源は長く、また、宗教、産業発展の影響も受けたが故に、各々の特性を出現させたのである。

6. おわりに

本論文は中国と日本に流れてきた蚕神信仰について比較を行い、日本における蚕神信仰は中国の影響を受けた一方、中国より一層豊富な形式が発展し

てきたことを明らかにする。また、日本の蚕神信仰は創世神話や神道の思想や産業発展などの影響を受け、独特性と多様性を表わすことを解明した。しかしながら、文献と遺跡の膨大で、日本の蚕神信仰に関する資料の整理はまだ不充分であり、その源と変遷に対する分析は詳しく展開していない。これからの研究はより豊富な資料を踏まえ、日本の蚕神信仰の変遷を決定する原因を分析して行きたい。

（この論文は未公刊の博士論文の一部である。）

注

[1] 中国語原文（以降「原文」に省略する）：贞元示五牛，蚕示三牛，十三月。

[2] 原文：有物於此，亻蠡亻蠡兮其状，屡化如神，功被天下，为万世文……人属所利，飞鸟所害……冬伏而夏游，食桑而吐丝，前乱而後治，夏生而恶暑，喜湿而恶雨，蛹以为母，蛾以为父，三俯三起，事乃大已，夫是之谓蚕理。

[3] 原文:流沙之东，黑水之西，有朝云之国，……黄帝妻雷祖，生昌意，昌意降处若水，生韩流……。

[4] 原文：黄帝居轩辕之丘，而娶千西陵氏之女，是为嫘祖。嫘祖为黄帝正妃，生二子，其后皆有天下。

[5] 原文：中春，诏后帅内外，命妇始蚕于北郊，以为祭祀。

[6] 原文：顺天地之纪，幽明之占，死生之说，存亡之难，时播百谷草木，淳（驯）化鸟兽虫蛾。

[7] 原文：今蚕神曰苑窳夫人，寓氏公主，凡二神。群臣妾从桑还献于茧观。

[8] 原文：汉仪，皇后亲桑东郊苑中，蚕室祭蚕神，曰苑窳妇人、寓氏公主，祠用少牢。

[9] 原文：北周制，以一太宰亲祭，进奠先蚕西陵氏。

[10] 原文：西陵氏之女嫘祖为帝元妃，始教民育蚕。

[11] 原文：西陵氏之女嫘祖为帝元妃，始教民育蚕，治丝茧，以供衣服，而天下无皱稼之患，后世祀为先蚕。

[12] 原文：旧说，太古之时……传说有蚕女，父为人掠去，惟所乘马在。母曰：‘有得父还者，以女嫁焉。’马闻言，绝绊而去。数日，父乘马归。母告之故，父不肯。马咆哮，父杀之，曝皮于庭。皮忽卷女而去，栖于桑，女化为蚕。

[13] 原文：今其冢在什邡、绵竹、德阳三县界。每岁祈蚕者四方云集，皆获灵验。蜀之风俗，诸观画塑玉女之像，披以画皮，谓之马头娘，以祈蚕桑焉……。

[14] 原文：成都圣寿寺有青衣神，即蚕丛氏也。相传蚕丛氏教人养蚕，时家给一蚕。后聚而弗给，瘗之江上，为蚕墓。

[15]『周礼・夏官』には、「夏官：質馬を握る…もとの蚕の者を禁ず」とある。鄭玄は「天文、馬は辰となす。蚕は龍精となり、月は大火に値し、その蚕を浴し、蚕と馬は同

気である」と注釈する。辰は星の名であり、すなわち、房宿であり、または天騶と称するのである。馬は大火は属し、蚕は龍精であり、蚕は大火二月に羽化するが故に、蚕と馬は同気なのである。漢代の『陰陽書』はまた、「蚕と馬は同類」と言うのである。この種の天象と物資、人事と連系させての解釈は、陰陽五行説と関連しているのであり、また、天と人を合一させる思想を反映しているのである。

[16] 原文：强弩之末，不足以穿鲁绪。

[17] 西陵氏は嫘祖である。

参考文献

中国側

曹建南（2000）「中日蚕桑起源传说的比较」『上海師範大学学報（哲学社会科学版）』（01）pp.25-32

顧希佳（1991）『东南蚕桑文化』中国民间文艺出版社 pp.54-56

顧希佳（2002）「吳越蚕糸文化向日本的伝播及其比較」『農業考古』（03）pp.92-133

汉・司马迁『史記』（2016）北京联合出版公司

胡厚宣（1972）「殷代的桑蚕和丝织」『文物』（11）pp.1-8

晋・干宝『搜神記』（2014）成都時代出版社

明・曹学佺『蜀中広記』（2018）国家図書館出版社

竺可桢（1973）「中国近五于年来气候变迁的初步研究」『中国科学』（02）pp.168-189

牟永抗，吴汝祚（1993）「水稻、蚕丝和玉器－中华民族起源的若干问题」『考古』（6）pp.523-533

南朝宋・范晔『後汉書』（2012）中華書局

唐・魏徵等『隋書』（2019）中華書局

陶紅，張诗亚（2010）「新石器时代蚕纹陶器和陶蚕蛹新论」『社会科学战线』（3）pp.259-260

施敏峰（2011）「多元并存与和谐共生：中国民间信仰的基本形态-以杭嘉湖地区蚕神信仰为个案的考察」『民俗研究』pp.136-146

遊修齡（2002）「蚕神：嫘祖或马头娘」『古代文明』（00）pp.298-309

袁珂（1980）『山海经校注』上海古籍出版社 pp.42

戦国・荀况『荀子』（2017）江蘇広陵書社

趙豊（1996）「丝绸起源的文化契机」『东南文化』（1）pp.67-74

宗宇（2012）「先蚕礼制歴史与文化初探」『芸術家』（08）pp.95-99

朱宗才（1998）「日本蚕业经济衰退始期的社会经济背景透析和思考」『中国蚕业』（74）pp.

日本側

伊藤清司（1979）『日本神話と中国神話』学生社

今野円輔（1956）『馬娘婚姻談』岩崎書店
『古事記』（1994）岩波文庫
小南一郎（1984）『中国の神話と物語』绿川亭
阪本英一（2008）『蚕の神々−蚕神信仰の民俗』群馬県文化事業振興会
長野市立博物館（1990）『蚕糸業にみる近代の長野盆地』長野市立博物館
渚島村（1933）『蚕神考』明文堂
『日本書紀』（1999）岩波文庫
柳田國男（2003）『遠野物語』角川文庫